

自著と 自閉症スペクトラム その周辺 —10人に1人が抱える「生きづらさ」の正体—

著者：本田 秀夫

SB新書 2013年3月
定価：730円+税

「自閉症スペクトラム」という言葉が、ここ数年で急激に一般メディアでも取り上げられるようになった。精神科医でなくとも、耳にする機会が増えたと感じている医師は多いのではないだろうか。本書は、自閉症スペクトラムに関する一般向けの啓発書である。

「自閉症スペクトラム」とは、「自閉症」、「高機能自閉症」、「アスペルガー症候群」などと呼ばれているグループの総称である。医学の中では、従来「広汎性発達障害」というカテゴリーで括られてきたが、1990年代後半頃から「自閉症スペクトラム障害」の呼称を用いられることが徐々に増えていた。その流れを反映して、2013年にアメリカ精神医学会より出版された「精神疾患の診断・統計マニュアル第5版(DSM-5)」では、「広汎性発達障害」の呼称が廃止され、「自閉症スペクトラム障害」がはじめて採用された。

本書で取り上げた「自閉症スペクトラム」は、医学概念としての「自閉症スペクトラム障害」よりも広い概念である。ごく簡単に要約すると、「臨機応変な対人関係が苦手、自分の関心、やり方、ペースの維持を最優先させたいという本能的志向が強い」という心理的・行動的特性である。このような特性を多少なりとも持つ人は、実際にはかなり沢山いる。教員の方ならば、このような特性を示す学生・生徒を担当した経験が少なからずあるだろう。医学部の学生（および卒業生である医師たち）にも、この特性の持ち主は相当いる。多くは、別に医療や福祉の対象とはならない。そのような人たちまで含めて「自閉症スペクトラム」として紹介する書籍は、おそらく本書がはじめてであろう。

筆者は、平成3年から平成22年まで横浜市総合リハビリテーションセンターに勤務していた。ここでは、担当地域で発達障害が疑われる子どもたちを一手に引き受け、診療と福祉サービス（療育、相談など）を提供している。支援は就学前から開始され、成人期まで継続される。ここで約20年間の臨床経験を積んだことによって、筆者は地域に住む発達障害の人たちを悉皆的に幼児期から成人期まで一貫して観察することができた。この貴重な経験に基づいて筆者が学んだ最も重要なことは、症状の軽重と社会適応の良否が必ずしも線形関係にはないということである。症状が重い人が社会生活に支障をきたすことは当然であるが、症状が軽いからといって社会適応の障害が軽度になるとは限らない。むしろ近年深刻な問題となっているのは、児童期は軽症であったために放置されていた自閉症スペクトラムの人たちが、思春期以降に深刻な抑うつ状態や不安状態を呈したり、学校などの社会場面に参加できなくなったりすることである。このような二次的な問題を予防することは十分可能であり、予防できた人たちは必ずしも障害者とみなされることなく通常の社会生活を送っている（筆者は「非障害自閉症スペクトラム」と呼んでいる）。しかし、二次障害を予防するためには、一見軽症な人たちに対しても、障害者として扱う必要はなくとも何らかの配慮があることが望ましい。

障害対応の不要な人たちまで広く含めれば、人口の10%程度の人には何らかの自閉症スペクトラムの特性があると思われる。10%というのは左利きや血液型のAB型と同じ程度の頻度であり、少数派とはいえ無視できない割合である。これらの人たちが社会の中でうまく生活できるためには、多様な個性を尊重し、得意なことと苦手なことをうまく補い助け合いながら生活していく社会の風土をつくっていくことがきわめて重要となる。本書のねらいは、そのための啓発である。

本書の主たる対象は、自閉症スペクトラムの当事者、保護者、支援者であるが、一般の人たちが読んででも有益な内容だと自負している。自閉症スペクトラムについて知っておくことは、あらゆる人たちにとって生き方を見直すきっかけとなり得る。医師や教員の方にとっては、日常の業務の中で必ず出会う自閉症スペクトラムの人たちの理解と支援の方向性を示す指針となるのではないかと思う。あるいは、ご自身の「生きづらさ」の謎を解くヒントが得られるかもしれない。ご一読いただければ幸いです。

(信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部 本田 秀夫)

